

春期福音特別集會（京都）

恵の光

——マタイ伝第5章1～12節、他——

1994年5月7日

小池辰雄

使命的存在 汝自身たれ 夏の最後のバラの花 キリストわが中にありて生きたもう ミステ
 リオン 終り無き詩 星の世界 救いの船（詩）「恵福なるぞ（八恵福）」福音の秘義 伝道
 する使命と栄光 イエスは眠り居給う キリストの直弟子の次元 キリスト道人 弔い合戦
 祈り

【マタイ5】

- 1 イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給えば、弟子たち御許にきたる。
- 2 イエス口をひらき、教えて言いたもう、
- 3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。
- 4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。
- 5 幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。
- 6 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。
- 7 幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。
- 8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。
- 9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。
- 10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。
- 11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言
 うときは、汝ら幸福なり。 12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より
 前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

【マタイ8】

- 20 狐は穴あり、空の鳥は罅あり、然れど、人の子は枕する処なし。……
- 24 視よ、海に大いなる暴風雨起こりて、その舟波のために蔽わるるばかりな
 るに、イエスは眠り居給う。

【マタイ13】

- 31 天国は一粒の芥種の如し、人これを取りてその畑に播くときは、 32 万の種
 よりも小さけれども、育ちては、樹となりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほ
 どなり。



【マタイ17】

1 六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びその兄弟ヨハネを率^ひきつれ、人を避けて高き山に登りたもう。2 かくて彼らの前にてその状^{さま}かわり、その顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ。3 視よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現る。……5 彼なお語りおるとき、視よ、光れる雲、かれらを覆う。また雲より声あり、いわく「これは我が愛^{いと}しむ子、わが悦ぶ者なり、汝ら之に聴け」6 弟子たち之を聞きて倒れ伏し、怖^{おそ}るること甚^{はなは}だし。7 イエスその許^{もと}にきたり之に触りて「起きよ、怖^{おそ}るな」と言い給えば、イエスの他は誰も見えざりき。

● 使命的存在

福音に関わるものを書くときには、私は頭で書かない。私の書いたものは全部、上からの導き、力、光、愛で書かせられているので、何を書いたか自分でもわからない。後から読み返して、自分で学ぶわけです。頭の仕事は私ほししない。何をするのでも、全身的な仕事をやる。

皆さんはみな人間だ。人間ということでお互いに一つだ。どこの国の人であろうと、人間であることに変わりない。どこ人なんて国境的な区別は福音の世界では要らない。全部、世界中は兄弟姉妹、主にあるところの兄弟姉妹です。顔はみな違います。同じ顔の人は一人もいない。人格というものは全部——神さまは最大の芸術家ですから同じものをお造りにならない——一人ひとりが天下一品であります。だから、ひとを羨^{うらや}む必要はひとつもない。本来の意味における自尊心——自らを尊重すること——本来の自尊ということは聖霊が来なければできない。そうでない自尊はヘタすると自我、自我心になってしまう。小池辰雄というのは世界中に一人しかいない。皆さんお一人お一人がみな特殊的存在です。だから、全部これは神の使命を負った使命的存在です。ところが、この「使命的存在」ということは今の教育者も殆ど考えない。旧約の預言者がみな使命的存在です。新約の使徒たちがみなそうです。最大の使命的存在はキリストです。

私はよく無、無者ということを言います。純粹な本当の無者はイエス・キリストだけです。キリストは神一切で、自分がない。ヨハネ伝で、

「我何^{あた}ことをも為し能^{あた}わず」

と言つていらつしやる。また、

「私は何も言っているのではない。神さまが言えということと言っているだけの話だ」

だ。為せということさせられているだけの話だ」

と。だから、キリストは本当の無者です。無者は誰かということ、イエス・キリストです。これは神においては無限無量者です。本当の無者は無限無量者なんです。神さまを一切と



しているから、これは無限無量です。

私たちも質的にそうなんです。私たちはキリストの無者なんだ。キリストから無を賜った。自我のない根源現実を賜った。どうやって自我のない根源現実を賜ったか。十字架です。十字架で過去・現在・未来の小池という罪びとは全部すつ飛ばされた。自我の無い者という根源現実を賜っているわけです。もうありがたくてしようがない。そこには無限無量のものがやってくる。それは聖霊です。

「我々の信仰はどうだ」

なんて、我々の信仰なんでものを問題にしたらしようがない。信交です。信じ仰ぐのではなく、キリストと信じ交わらなくてはしようがない。

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

という現実に入らなければダメなんです。本当の夫婦というものはそういう関係でしょ。

「我が汝か、汝が我がか」

という、融合している世界です。大自然と融合するような魂にならなければダメなんです。

●汝自身たれ

京都大学に西田幾太郎先生という方がいました。あの先生が

「我は我なり、人は人なり」

と言った。あの言葉は大事な言葉です。

「人真似は要らん、自分は自分だ、人は人だ、それぞれの路を行けばいい」

と。さすがは西田先生ですね。

私の無教会の先輩に三谷隆正という方がいた。三谷先生が書いたものの中に

「ビー ザイセルフ（ユアセルフ）」（汝自身たれ）

と書いてある。これはエマーソンの言葉です。三谷先生はこの言葉が好きだ。先生が学生の頃、内村先生の集會に他の学生たちと招かれた時に、内村先生は

「君たちは何を求めてやってきたか」

と聞かれた。三谷先生は

「もし私の番がきたら、『私は私自身でありたいと思います』と答えるつもりであつた」

という。三谷先生らしい。

それはどういうことかという、神さまに一人ひとり絶対特殊なものとして造られている。だから、自分自身でなかったら、人真似したら、神さまの創造に対して申し訳ないわけです。日本人はあまり人のことを倣いすぎる。そして、すぐグループをつくって、同じようなことを言ったりしている。どうして、もっと本当の個であらうとしないのか。

「汝自身たれ」



ということ。汝自身であることが一番神さまに忠実なことである。

「私がこの世界に貢献することは何かというと、私が私自身であることである」

と、三谷先生の文章の中にそういう言葉がある。私が私自身であることがこの世界に対する最大の貢献だと。

佐々木吉三郎という小学校の校長さんがいました。その校長の講堂修身の話には私は感激して聞いていた。内容は忘れましたがけれども。頭でものを言わない。全存在的でものを言うていた。

●夏の最後のバラの花

英語の歌に THE LAST ROSE OF SUMMER (アイルランド民謡、邦訳『庭の千草』) という歌がある。

Tis the last rose of summer,	夏の最後のバラの花
Left blooming alone;	ただひとり咲きのこつてゐる。
All her lovely companions	愛しい仲間たちはみな
Are faded and gone;	しおれて去っていった。
No flower of her kindred,	あたりには身内の花も
No rosebud is nigh,	バラのつぼみもない、
To reflect back her blushes,	はじらいを返し合ふ
Or give sigh for sigh.	ため息をわかとつとも。

これは「夏の最後のバラ」という歌で、実は兄貴が時々歌っていたので、それで聞き覚えた。兄は非常に歌が好きでよく歌っていた。

私自身がまさに

「ザ ラスト ローズ オブ サマー」(夏の最後のバラ)

なんです。私はもう90歳で、今は私の従兄弟も兄弟姉妹も親戚もみなくなりました。私は、唯だひとり遺された「最後のバラの花」、最終的存在なんです。同僚たちも皆いなくなってしまう。今、誰が生きているかわからない。もう殆どいない。一番弱虫の一番泣き虫のダメなやつが一番遺されて叫んでいる、キリストさまの証者として。何も恐いものはない。私みたいな弱虫が本当の英雄になる。イザヤ書にも

「遺されたる民」

という言葉がありますが、私は遺りものなんだ。最後に遺されているということとは或る特別な使命を担わされているということ。それをひしひしと感じております。そのことをキリストさまに、私は祈りにもならないような気持ちでもって平伏します。

キリストという福音体のために、キリストにあつて、キリストのために、全身を燃やさなくてはいかん。また、燃やさざるを得ない。



ルカ伝12章49～50節、

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来^{きた}れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い^{せま}逼ること如何^{いかばかり}許そや。」（ルカ12・49～50）

とは、素晴らしい言葉です。

「火を地に投ぜんとて来た」

とは、言うまでもなく、聖霊です。

「聖霊を投ずるためにやつてきた。けれども、それはいきなりできない。それが燃えたら何も望みはない。けれども、受くべきバプテスマ、十字架がある。十字架をもつて贖罪の死を遂げなければ、聖霊をお前たちにやるわけにいかない」ということ。十字架を土台にしないで

「聖霊、聖霊」

なんて言うのは絶対にダメです。十字架と聖霊は分けることができません。パウロはまさにそのようなひとでした。

●キリストわが中にありて生きたもう

ガラテヤ書2章20節の、

「我れキリストと共に十字架せられたり。もはや我れ生くるにあらず。キリス

トわが中^{うち}にありて生きたもうなり」（ガラテヤ2・20）

とは何ですか。

「聖霊のキリストが、キリストの聖霊がわがうちに生きたもう」

ということ。パウロの福音はそのような構造になっている。その点ではヨハネはスーツと行っているけれども、パウロはそのような大事な構造を身をもって証しているわけです。パウロというのは選^{えら}びの器だ。あれは本当は^が私の強い男だった。復活のキリストに、

「なんぞわれを迫害するか！」

と、その我をすっかりダマスコ途上でひっくり返されて、一八〇度転回してしまった。あのパウロの回身は——ただの回心ではない——全存在を、身をひっくり返された。パウロは本当に身をひっくり返された。三日三晩、目が見えず耳が聞こえずものが言えず。アナニヤに按手されて、

「わが眼より鱗^{うろこ}の^いときもの落ちたり」

と。ああいう劇的な記事をいかげんに読んだらダメです。そこで自分で祈り込まなくては。祈りしなくては。キリストの中に自分を投げ入れることが本当の祈りなんです。全存在的に自分をキリストの中に投げ入れる。それでなくて、ただ

「祈り、祈り」



なんて言っただけです。

「無者」という無は賜りたる無なんです。この無は虚無ではない。また、悟りの無ではない。無者というのは「我無き我」ということ。我無き我となると、それが質的に無限無量者になる。

「十字架の無者とされたから、今度は聖霊の無限無量者にされる」

と。とにかく、これは楽しくてありがたくてしょうがない。あなた方、そう思わないですか。私はあなた方にお説教しているのではない。告白している。体験をただ語っているだけです。私たちは語るも聞くも同じこと、一緒にキリストの中に入っていく。パウロのようにキリストにぶつ倒される。そうすると、キリストが立ち上がらせてくださる。ペテロが波の上を渡ってキリストの所へ行こうとしたら、波風を見て恐がったから沈みかかった。キリストはペテロを捕まえて、

「信仰うすき者よ」

と言われた。うすいのではない。本当は無くなってしまっている。イエスというひとは大変なひとだ、湖の上を渡ってくるし。

よく、「キリストの復活」と言うが、復活ではない。キリストの本来の霊生が現れただけの話です。

「復た息を吹き返して復活した」

ではない。十字架という大事な贖罪の死を遂げたあとは、また霊体として現れざるを得ない。戸が閉まっても、十一の使徒の所へやって来たでしょ。そして、お魚を食べた。大変な現実です。物語ではない。あれは本当ですよ。ああいうものを読んで平伏さなければダメです。無者の姿は平伏しの姿なんです。本当に平伏さない者は本当に立ち上がることができない。

●ミステリオン

私は自分のことを

「天弓」

と号している。虹のことです。天弓という言葉は中国語にある。太陽の光は無色、水の水滴も無色。無色の光が無色の水滴にぶつかって七色の虹ができる。不思議なものだ。無即無限無量の一つの現れ方です。ちよつとそれと似たようなことを言っているのはシラーの『アイ・クンストラ』(芸術家たち)という詩です。

ギリシア語に「ミステリオン」(神秘)という言葉があります。信仰の世界は本当はみな神秘です。本当の信仰、信交の現実には神秘です。祈りそのものが神秘です。本当の祈りは、こちら側から祈るのではない。祈らされている。上からの力で祈らざるを得なくされている。いわゆる人間的な熱心な祈りなんてのはダメです。上からのもの凄い霊的な力がくるから……(異言)……



私はさつき

「語るも聞くも同じこと」

と言ったでしょ。あなた方も同じ境地に入っているでしょうね。

「先生はいろいろなことを言ってますらあ」

ではないよ（笑）。

「私も心の中では同じことを言っているんだ」

と、キリストの中に一緒になって溶け込まなければダメです。溶け込むのではなくて、本当はキリストに圧倒されているんです。キリストに圧倒されなければ、私はこんなことを言えない。

「恵の光」（讚美歌87番B）は私の母の愛唱の讚美歌だった。

「めぐみのひかりは わがゆきなやむ

やみ路を照らせり、 神は愛なり。

われらも愛せん、 愛なる神を。」

我々は人生のいろいろな闇路やみじにでつくわします。その時に本当に

「神は愛なり」

と言う。いかなる状況においても、

「神は愛なり、キリストは愛なり」

と、これが本当に言えなければ、信仰なんて言えないわけだ、

「こうであればいいのに」

なんて言っているうちは。一切の運命環境に対して「神は愛なり」と、そこまで突き抜けるためには、いいかげんな信仰ではダメです。本当にキリストが生きていなければ、それが言えない。キリストをまだ対象化しているうちはダメです。キリストの中に生きていなければ、それが言えない。

「主さまー」

と言えば、直ちに自分が入ってなければダメなんです。あるいは、その中で「主さまー」と叫ばなくてはいかん。私は寝るときに床とこの上に坐って、この無言の「主さま」を全身でもって沈黙の叫びをする。これが祈りです。他は何もいらぬ。「主さま」一言だけ。言葉にならない。本当の世界は言葉にならない。

●終り無き詩

「声前一言、千聖不伝」
せいぜんのいちげん せんしやうふでん

という。声を出す前の一つの言は千の聖人もこれを伝えることができないという。

詩篇19篇3節に、

「語らず言わずその声聞こえざるに、その響きは全地にあまねく、そのことば



は地のはてにまでおよぶ」（詩篇19・3）

とある。詩篇や預言者の言葉は、聖書は、意味の世界ではない。響きの世界ですから。その中に本当に自分を投入して、自分もその響きにならなければいかん。本当の一番深刻な音楽の世界です。芸術の上では音楽が一番、人間の魂にはふさわしい。言葉で表現できる世界はまだ大したことはない。

ダンテもゲーテも完璧な詩を書いたけれども、本当は完璧ではダメなんだ、未完成でなければ。完璧なものとは、それでお終いという世界だから。未完成交響楽がいい。終り無き世界がいい。私は「終り無き詩」を書こうと思っている。

「なんだ、これは尻切れとんぼだ」

なんて。尻切れとんぼでいい。ミケランジェロは彫刻していて、最後はノミを投げたという。皆さん、無限無量のそういう魂になりなさいよ。

「これでいい」

なんていう世界は絶対にはないから…（異言）…。

本当の福音の世界は、ヨハネ伝の終りに書いてあるように、

「この他にキリストの言ったことはいくらでもあつて、とても書ききれない」

という世界だ。ルターが

「聖書は神の言のかけらだ。これで聖書は終りだと思つたら大間違いだ。断片に過

ぎない」

と言つた。一頁を読んで、その一頁の中に何頁の分を自分でもつて、その先を創造していくような読み方をしないとね。そうなるんです、聖霊の世界は。たくさん読む必要はない。グーッとくるから。生命が来てしようがない。

●星の世界

私は自分で90歳なんて思つていませんよ、19歳だ（笑）、そんなものだ。歳なんか数えることをやめた、バカらしいから。

「多分、幾歳まで生きます」

なんて、何を言っているか。終りが無いんだ。

「小池先生は死んだ」

なんて絶対言わないでもらいたい。「往生した」と言つてください、

「とうとう先生は往生した。あちら側に往つて生きています」

と。ブラウニングは

「私が死んだら、歓呼の声をあげてくれ」

と言つた。さすがはブラウニングだ。ゲーテは

「もつと光を」



と言って、椅子に寄り掛かったまま往ってしまった。ヒルティは

「私は隣の部屋に往く」

と言った。死ぬと言わない。皆さんも、そういった烈々たる弾力性のある魂になる。一人も例外なし。一緒に告白している。

あなた方、時々夜、星の世界を見るかい。私は星を見るのが好きだ。見ると言っても、私は見ながら全存在が宇宙の方へ走っていく、飛んでいく。星の人になる。私のは神秘の世界なんだ。

「先生は少し気違いだ」

なんて、それは少し気が違っているよ、普段のと。しかし、いわゆる気狂いではない。

『星の界』^よ（作詞 杉谷代水、賛美歌312 「いつくしみ深き友なるイエスは」^曲で）

1 月なきみ空に きらめく光

ああその星影 希望のすがた

人智^{じんち}は果^{はて}なし 無窮^{むきゆう}の遠^{おち}に

いざ^そ其の星影 きわめも行かん。

2 雲なきみ空に 横とう光

ああ洋々たる 銀河の流れ

仰ぎて眺^{なが}むる 万里^{ばんり}のあなた

いざ^さ棹^{さう}させよや 窮理^{きゆうり}の船に。

この終りの句は素晴らしいね。船に乗って星の世界に行こうではないかと。こういう崇高な内容の調子の歌がこの頃なくなってしまった。あまりテレビなんか見ない方がいい。瞬間的なものばかりでしょうがない。日本人は終いにおかしくなってしまうのではないかな。

●救いの船

この福音をいただいた者が日本を救うのでありまして、他に救いはない。皆さんは

「救いの船」

なんだ。そのことを大いに自覚してください。キリスト者というのはそれだけの力を持っている。それでなければ、クリスチャンなんて言わない方がいい。観念クリスチャンはダメだ。だから、私は

「クリスチャン」

という言葉は嫌いだ。キリストの証者、証し人です。キリストを体現する人たち、身体で現する人たちです。「信仰者」なんて言わない方がいい。すぐ

「信仰、信仰。あなたの信仰は？」

なんて言う。

「私は信仰なんかありません。私はクリスチャンではありません。私は凡人^{ただびと}です、



ペテロみたいに。無者です。キリストの直弟子の友だちです。天界にパウロさん、ペテロさん、ヨハネさん、イザヤさん、エレミヤさん、そういう友だちがいますよ」と言った方がいい。本当にそうですよ、我々は。パウロ、ペテロ、ヨハネの友だちだ。

キリストにある権威、御霊みたまの権威というものは凄い。それは十字架でぶつ倒されているから。十字架の土台のない聖霊なんてものは、十字架をいいかげんにしているようなのは、私は信用しない。パウロが言っているでしょ、

「十字架の他は何をも語るまじと思ふ」

と。パウロは選びの器だ。キリストにまっこうから逆らっていた者が一番凄いキリストの証者となった。こんな鮮やかな変化はない。身体を回めぐらした「回身」です。心（回心）ではない。全存在です。

楽しいね、今日は。あなた方も楽しくて力が来てしようがない、熱くてしようがない、という気持ちで聞いていらつしやると私は信じています。

●（詩）「恵福なるぞ（八恵福）」

山上の大告白のところが私は詩にした。

（召団讃歌A47）「恵福なるぞ」（八恵福）

（1987年9月1日作、田中穂積作曲「美しき天然」の曲で）

- | | | |
|---|---|---|
| 1 | 恵福 <small>あひわい</small> なるぞ | 汝 <small>な</small> が霊 <small>たま</small> は |
| | わが十字架に | あがなはれ |
| | 無の貧しさに | 澄む <small>すみれ</small> 堇 |
| 2 | 汝のものよ | 天国は |
| | 恵福なるぞ | 侘 <small>わび</small> しらに |
| | 野に咲く桔梗 <small>ききょう</small> | 昨日今日 <small>きのうけふ</small> |
| | 悲しむ人よ | キリストは |
| | なぐさめ給ふ | 涙して |
| 3 | 恵福なるぞ | 柔和なる |
| | 影は河原の | 撫子 <small>なでしこ</small> よ |
| | 斯 <small>か</small> かる人こそ | 地を嗣 <small>つ</small> がめ |
| | この世の末の | 聖国 <small>み</small> にて |
| 4 | 恵福なるぞ | 夏の日の |
| | 向日 <small>ひまわり</small> 葵草 <small>あひま</small> の | すがたにて |
| | 天 <small>あま</small> つ義 <small>ひ</small> の陽 <small>ひ</small> に | 飢え渴く |
| | そのたましひは | 飽くを得ん |
| 5 | 恵福なるぞ | 紅 <small>くれなゐ</small> の |



	薔薇 <small>そうび</small> の如く	芳 <small>かぐ</small> はしく
	人を憐 <small>あわ</small> れむ	愛の人
6	主のあはれみに	愛せらる
	恵福 <small>しらゆり</small> なるぞ	谷川の
	白百合 <small>しらゆり</small> の	清らけき
	心の人は	隠 <small>うつつしよ</small> れたる
	神を見るなり	現世 <small>うつつしよ</small> に
7	恵福 <small>ゆか</small> なるぞ	平安の
	床 <small>ゆか</small> しきすがた	コスモスよ
	平和 <small>かも</small> を醸 <small>か</small> す	その人は
	げに神の子と	称 <small>とな</small> へらる
8	恵福 <small>か</small> なるぞ	義のために
	責められし人	天国は
	その人の有 <small>もの</small>	桜花
	散りゆく相 <small>すがた</small>	美 <small>うる</small> はしや

●福音の秘義

キリストの慰めは本当に凄いから。いかなる人に棄てられても、キリストだけは棄てたまわぬ。

「人は棄つれど、きみは棄てず」

と賛美歌（513番）にある。どんな現実であろうと、

「主さまー！」

と言って全身で叫べば、キリストは本当につかまえてくださる。これは体験すればわかる。その「主さま！」と叫ぶときには自我がない。

意志の強い人がたくさんいるよ。しかし、人間の意志が強いなんてたかが知れている。この聖霊の力というものはそんなものではない。だから、皆さんは、

「自分はともも意志が弱くて、感情が薄くて……」

なんて、そんなことはどうでもいい。この十字架を土台にした御霊をいただければ、これは無条件の世界に入る。無条件に素晴らしい、それ自身が天国です。天国を現じていく人になる、天国体になる。あなた方は一人ひとり、天国体なんだ。周りに天国を現じていく。

「何か知らないが、あの人のそばにいくと暖かいな、安心するな、明るいな」

と、そのような証者にならなければつまらないよ、これだけの福音をいただいでいて。

「求めよ、さらば与えられる」

という。我々は何を求めるのか。キリストそのものを求める。そうすると、知らない間に、



キリストが必要なものはくださる。

「これをください」

ではない。

「あなたをいただきます。後はどうなってもいいです」

と。結果や目的を思ってはダメです。結果も目的も要らない。キリストだけをいただければ、キリストは然るべき花を咲かせ果を^み実らせる。これが本当の福音の世界の神秘の秘義だね。絶対に行き詰まらない。嘆息をもらす必要がなくなってしまう。本当ですよ、私は説明しているのではない。体験から言っている。

「運命環境はどうにでもなれ、キリストがごさる」

と、それだけです。

●伝道する使命と栄光

「この人だ」と思ったら、その人に一対一でぶつかっていく。そして、その人をひっくり返してしまう。そういうのが本当の伝道です。誰でも彼でもではない。

「この人は救つてやりたい」

と思う人に一対一で伝道してください、あなた方一人ひとりは伝道者だから。キリストという道を伝えなかつたらもつたいたい。

あなた方、私の著作集全十巻を時々、どこでもいいから読んでみてください。一頁といえども私は無駄なことを書いたつもりはない。いわゆる説明はないはず。みな告白です。アウグスティヌスの告白だとか、ルッソーの告白だとかいろいろあるけれども。

告白の究極はみな讚美です。詩篇の祈りをみてごらん、最後はみな讚美になっているから。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたもうや」

という詩篇22篇でも終りは讚美になっている。始めは悲しくて苦しくて祈っていても、終りはハレルヤになっている。それはキリストの中に入るからです。キリストの中に入らなかつたら、それはできない。そんなにキリストというのは有り難いひとだからね。霊的な大変なひとだ。お釈迦さんもエライでしょうけれども、キリストはちよつとケタが違う、質が違う。そういう福音に我々とはかくぶつかったのだから、あなた方、毎日毎日、力が来てしょうがないではないですか。そうでなかつたら、ウソだよ。

「ああ、今日はくたびれた」

とか、

「飽きてしまった」

とか、そんな気持は全然起きてこない。本当ですよ。

皆さんお一人お一人は、一人ひとりをつかまえて伝道する義務と栄光がある、使命がある。それをしなかつたら、あなた方の信交そのものが腐ってしまう。そんなことはない私は



思っています。

「私は救われてうれしいです」

と、それだけではしょうがない。うれしさを人に分けなくてはね、

「これを分けざるを得ません。与えざるを得ません」

と言って。

●イエスは眠り居給う

マタイ伝8章20、24節、

「²⁰狐は穴あり、空の鳥は^{ねぐら}罅あり、然れど、人の子は枕する^{としろ}処なし。」（マタイ8・

20）

「²⁴視よ、海に大なる暴風雨起りて、その舟波のために^{おお}蔽わるるばかりな

るに、イエスは眠り居給う。」（マタイ8・24）

舟がひっくり返りそうになっているのに、キリストは寝ている。舟の上だつて、神の懷の中でキリストは寝ている。神に全托しているものだから、その舟はひっくり返らない。やはり大変なひとだ。皆が

「危ない危ない、ひっくり返りそうだ」

と言うので、キリストは起きて風と波に、

「^{しず}鎮まれ！」

と言つたら波が静まつてしまった。それだけ神の力の中に入っているまったく大変なひとだ。もう平伏して読まなくては。そして、キリストのその力を分けていただかなくては。

私の著作集第十卷『聖書は大ドラマである』の「人の子は枕する処なし」（9月23日）の項を読みます。

「狐には穴がある、空の鳥には樹の中に^{ねぐら}罅がある。ところが、人の子、私には枕するところが無い」とイエスは言った。彼には一定の宿るところがない。無宿者である。石枕、草枕、或いはイエスを迎えるどんな人のところにも一夜を明かす。この場合は弟子たちと舟に乗っておられた。ところがガリラヤ湖上を暴風が吹きまわつてきた。舟は波をかぶるばかりになった。それでもイエスは眠っていた。艫の方に^{しとね}茵を枕として（マルコ4・38）。弟子どもは舟が沈むと言つて恐がつてイエス呼び起こした。イエスは風と波に「^{もた}黙せ、^{しず}鎮まれ」（マルコ4・39）と叫んだ。すると大なる^{なげ}風となった。そして弟子たちに「なぜそんなに恐がるのか、信仰なきは何ごとか」（マルコ4・40）と言った。枕するところなき「人の子」キリストは到るところを枕とする人であった。いつ、いかなる処でもそこを神のふところとして眠ることのできる平安の魂であった。彼の信仰の現実、我々がどこにいても空気のなかであるように、いづいづいでも神のふところの中、み腕の中であった。我々がいつどこであろうと我れキリストの中、キリス



トわが内という現実が身につけて来たなら、えらいことになる。それを身を以て証したのは、実に使徒パウロであり、且つペテロ、ヤコブ、ヨハネであった。信仰とはまさに信交という現実となつてこそ本ものである。祈りの魂でみ霊の内住が身につくことを要する。」

●キリストの直弟子の次元

キリストの直弟子の次元、我々も同じ次元に入らなければつまらないですよ。私たちも使徒的信交なんです。ルターでもカルヴィンでもみなキリストの直弟子の次元にいきたかつたんだ。そういう次元に入ると、あなた方お一人お一人が賜っているところのいろいろな才能、能力が本当の働きを始める。それを通して福音がおのずから証しせられていく。それ以下のものは福音にあらずということ。我々の信交の現実というものはそういうものです。

「私はいわゆるクリスチャンではありません、ただの人間です。けれども、キリス

トは私の中に生きています」

と言つたら、皆びつくりするよ。

マタイ伝17章1～7節、

「廿六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びその兄弟ヨハネを率きつれ、人を避けて高き山に登りたもう。²かくて彼らの前にてその状^{かたち}かわり、その顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ。³視よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現る。……⁵彼なお語りおるとき、視よ、光れる雲、かれらを覆う。また雲より声あり、いわく「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり、汝ら之に聴け」⁶弟子たち之を聞きて倒れ伏し、怖るること甚^{はなは}だし。⁷イエスその許^{もと}にきたり之に触りて「起きよ、怖るな」と言い給えば、イエスの他は誰も見えざりき。」（マタイ17・1～7）

天からそういう声がして、弟子たちはみな参つてしまった。聖書のこういう表現は凄い。驚きをもって圧倒されながら読まなくてはダメですよ。

「そんなことがあるか？」

なんて思つたら、もうダメです。

「参りました！」

と、降参して読まなければ。降参するとその世界に入れられる。

これだけの方々の一人ひとりがそういう使徒的信交の世界に入つて、一人二人三人と、使徒的な伝道をおのずからしていけば凄いことになる。皆さん一人ひとりには伝道者ですよ。一対一の伝道をしてください。しなかつたら腐つてしまうよ。あなた方お一人お一人は大事な個人です、使命あるところの存在です。キリストの証者は、福音者は、伝えざるを得



ない、証しせざるを得ない。

「斯くせざるを得ないという世界が一番本当だ」

とヒルティが言っています。ルターも或るところで

「私は他のことはできない。斯くあらざるを得ない」

と言った。アッシジのフランチェスコなんかもそういう棄身の伝道者だった。最後は本当に自分を泥の中に入れて、本当の棄身になっている。「棄身」というのは素晴らしい言葉だ。

「二つ無き道にこの身を棄て小舟波立たばとて風吹かばとて」

これは西郷南洲の歌です。

「私の道は一つなんだ、その道に自分は棄身だ、波が立とうが風が吹こうが一向差し支えない。もう自分は棄身なんだ、何でも来い、波立たばとて風吹かばとて何かあらん」

ということですよ。南洲というのは深い人情味のあるひとだ。それからまた烈々たる意気を持つている。この二つを持たなければダメです。

●キリスト道人

日本の皇族も少し福音を受けるといい。聖徳太子は仏教の方の凄い方だった。今の天皇は若いから、話してくれと言われればいくらでも私は話しにいくんだけど。

普通は

「ああ、キリスト教か」

なんて言っている。キリスト教ではない。私は「キリスト教」という言い方は嫌いだ。教えではない。これは道なんだ。キリスト道です。

「我は道なり」

とキリストは仰った。

「我は教えなり」

なんて言わない。日本人は道の世界のひとなんです。真理を身をもって歩くのが道なんです。そうでなかったらどうしようもない。真理を頭でわかるようではダメなんだ、身をもって歩かなければ。だから道者なんだ。老子が

「無道の道」

と言った。道無き道という。その人の歩くところに本当の道ができる。いわゆる道路の上を歩くのではない。

人は歩くのは、各々の足で歩く。これが「路」という字だ。「道」は天道です。キリストの天道を本当に身をもって歩くのが路なんです。我々はこの路にならなくては。天道を歩いていかななくては。そうすると、道に即しているところの路です。それを「道路」という。キリスト道に即して歩くと、本当のその人らしい路が現れていく。一人ひとり、路が違う。



だから「足篇に各々」と書く。

漢字というのは素晴らしい。世界最高の文字です。無という字は

「大空の下の 甘^{にじゅう}甘^{にじゅう}の林の木」

を表している。四十の林の木の数は数えられない。無という字は無数を表す。

何しろ、この頃の教育はケチくさい。もう少し大胆にやらなければダメだ。小学校の先生方が福音の世界に入らなければダメだ、教育者がまず福音を受けとらなければ。

「ああ、キリスト教か」

なんて、「キリスト教」なんて言うからダメなんだ。道なんだ。老子の道と同じだ、老子の道よりももつと凄い。柔道、剣道というでしょ。柔術、剣術ではない。茶道、華道という。道というのはそういう深い内容を持っている。我々は道人なんだ。道の人だ。福音者はキリストの道人、キリスト道人なんだ。

● 弔い合戦

マタイ伝13章31～32節、

「天国は一粒の芥種^{からしだね}の如し、人これを取りてその畑に播くときは、^{よろず}32万の種

よりも小さけれども、育ちては、樹となりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほ

どなり。」（マタイ13・31～32）

「天国は一粒の芥種の如し」

という。我々一人ひとりが芥種なんです。そうするとこれがえらいことになる。私にとつての芥種は長兄の小池政美です。彼がいなければ、私はこの福音の世界に入れなかった。彼は死をもつて証した。彼が持っていた本で一番先に私が手にしたのは『宗教と現世』という内村鑑三先生の本でした。それで私は感激した。

「これはキリストの世界に入らなければいけない」

と思った。私は小池政美の弔い合戦^{とむち}をしているんだ。本当は26、27歳でもつて^{たお}仆れるような人ではないんです。

私は今、大きな詩を書いている。この詩を投じなければ、次の世界に往くわけにはいかない。戦いの詩です。ダンテは『神曲』を復讐の詩だと言った。

「神聖（デイバイン）なる復讐（リベンジ）だ」

と言った。私もそうです。何事かに対する復讐なんです。結局、相手はサタンだ。

「キリストの力だからサタンに負けるか」

という。サタンというのはいろいろな人を使ってサタンの業^{わざ}をするから。生まれつきの弱虫の泣き虫がどうしてこんなことになったか、自分でも不思議でならない。

私たち一人ひとりはそのような芥種です。鳥が来てそれに宿るくらい大きな木になる。キリストの譬え話の言葉というのはいろいろな。



「これだけの烈々たる福音の世界だぞ」
というわけです。この文字の響きを、キリストの気魄を受けとつていかなければしょうがない。意味の世界ではないんだ。響きと気魄の世界です。

● 祈り

祈ります。

主さま、御前みに平伏します。あなたの福音の響きの一端を承り、全身をもつて感謝いたします。あなたに在つての掛け替えのない兄弟姉妹たちと共にこの第一回の集会をこのようにしてお導きくださり、ありがとうございます。僕しもべはしようがない者ですけれども、この僕を通してあなたのみ光が、み力が、み言が、とにかく伝えられています、兄弟姉妹たちはそれ以上のものを自ら受けとらせていただきました、ありがとうございます。

兄弟姉妹たちと共にこの福音を私たちは証しせざるを得ません。どうぞ、いよいよ素晴らしい福音の戦いをさせてください。兄弟姉妹たちを通して、この世界を知らないところの隣人たちに、一人二人三人と、

「ああ、こんな素晴らしい世界があるか」

と彼らを驚かせてください。かくして、本当に

「福音とはこのようなことであつたか。今までキリスト教なんて思つたのはとんで

もない間違いだった」

と、そういうように悟らせてくださるようお願い奉ります。

また、明日もいよいよあなたが導いてくださり、兄弟姉妹たちを通して自由にあなたが語ってくださるように願ひ奉ります。尽くしません、心からの感謝と讚美、イエス・キリストの御名にあつて捧げ奉ります。アーメン。

